

## クレマンティーヌ=エレーヌ・デュフォーによるソルボンヌ大学装飾画 —新たな科学概念と身体表象をめぐって—

原田佳織（日本学術振興会特別研究員 PD／成城大学）

本発表は、20世紀初頭に国家注文を受けて制作され、ソルボンヌ大学権威の間に設置されたクレマンティーヌ=エレーヌ・デュフォー（1869-1937）の装飾画連作（1908～1910年）をとりあげ、当時最新の科学概念を扱う主題と独自の身体表象に着目し、同時期の他の公共装飾画との比較を通じてその位置づけを試みるものである。

画家デュフォーは作品の国家買上などを経て、当時の女性としては稀な公共装飾画の国家注文を受けてソルボンヌ大学装飾画「科学」連作《放射能と磁気学》《天文学と数学》（1908年）、《地質学》《動物学》（1910年）を制作し、フランス芸術家協会の展覧会に出品した。自然科学を扱うこの四連作の主題は、同時に注文を受けて第一次大戦後に完成したエルネスト・ローラン（1859-1926）の装飾画「文学」連作《歴史》《哲学》《雄弁》《詩》（1915年）で扱われた人文科学の主題と対をなすものであった。デュフォーの連作については、ソルボンヌ大学装飾画の目録作成者オットマンの記述（2007年）および象徴主義の芸術環境における女性芸術家の活動を扱ったフシエールの博士論文における記述（2012年）の他にはほとんど研究がなく、自然景と人物を組み合わせたその表現について、同時代の公共装飾画家アルベール・ベナール（1849-1934）による科学主題の先例、すなわちパリ市庁舎科学の間天井画《諸科学を導き、人々に光を放つ真理》（1890年）やソルボンヌ大学旧化学大講堂装飾画《死から再生する生》（1897年）に認められるような象徴主義的表現の影響が指摘されてきた。

しかし《放射能と磁気学》には明らかに、宗教的図像を応用しているベナールや、大地と結びつく伝統的な母子像を描いたローランとは異なる、新たな試みが認められる。そこには大地を表す女性像と大気を表す男性像の組み合わせによって、当時よく知られていなかった放射能という科学概念の視覚的解釈が提示されており、独自の方法で女性像と自然とを結びつけることで従来の象徴主義的表現が刷新されているのである。さらに、その暗示的手法は1880年代後半から流行する象徴主義が当初めざした、従来の知覚では認識できない概念を表す試みをまさに体現しているのである。

ただし、このデュフォーの新たな人物表現には従来の男女表象を踏襲した側面もある。またデュフォーに関する20世紀初頭の批評では、デュフォーは「女流」の響きのある「女性画家」ではなく男性の「画家」になぞらえて称賛されると同時に「女性的」とも評されており、デュフォーの装飾画に対する評価はこのようにジェンダー化された批評言語の特質を踏まえて検討する必要がある。

本発表はこうしたデュフォーの表現とその受容の特質を考慮して本連作の位置づけを考察し、表された科学概念の難解さゆえに理解されなかった側面のあるこの連作が20世紀初頭の公共装飾画における新たな象徴主義的表現を展開するものであったと結論づけたい。